



## 内容

### センター活動報告 ..... 1

フンボルト財団 (AvH) ネットワークミーティングに参加 ..... 1

"G7 + PARTNERS" HIGHER EDUCATION SUMMIT 2022 に参加... 1

日独学術シンポジウム開催 ..... 2

サマー・プログラムキックオフミーティング、

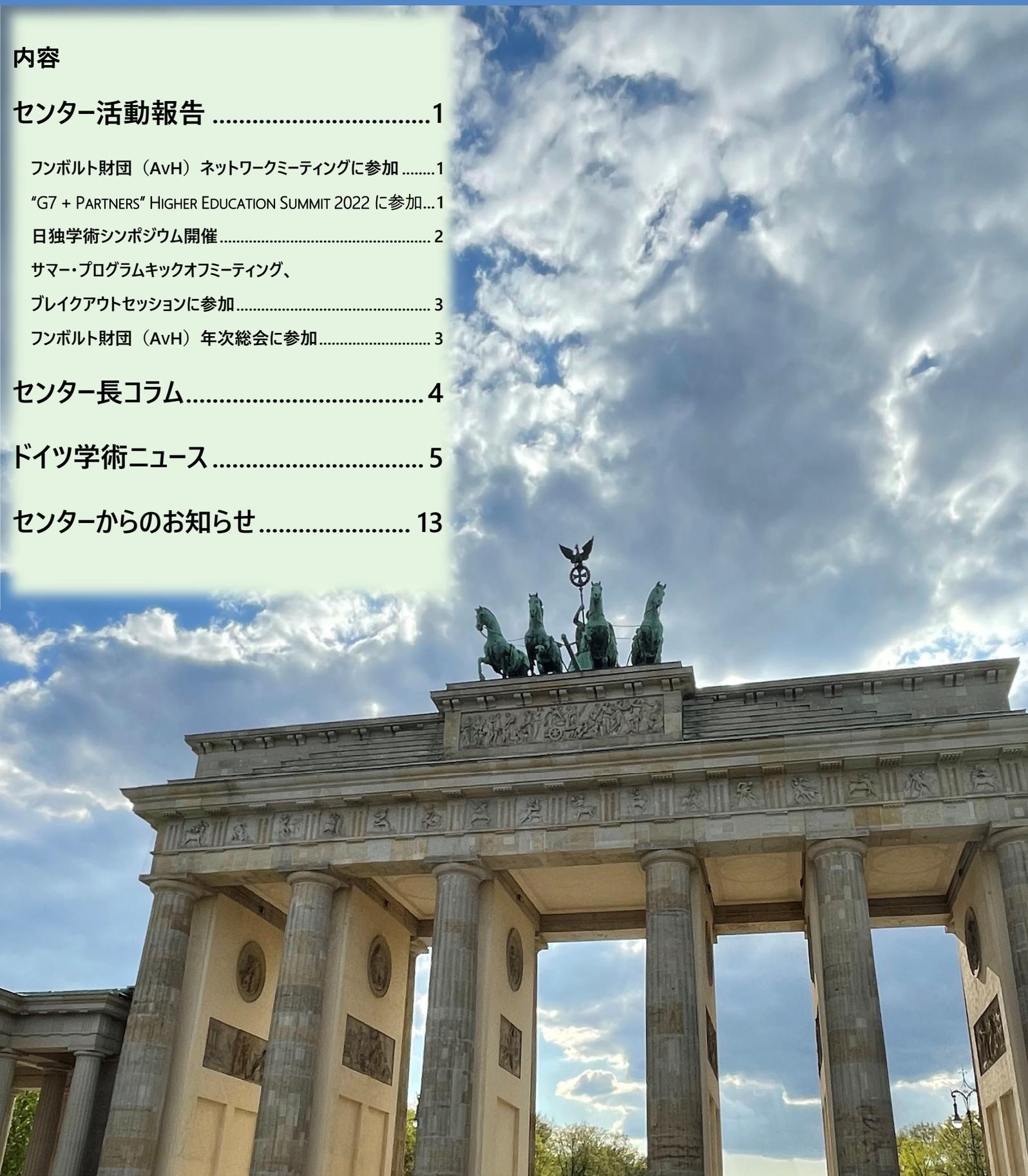
ブレイクアウトセッションに参加 ..... 3

フンボルト財団 (AvH) 年次総会に参加 ..... 3

### センター長コラム ..... 4

### ドイツ学術ニュース ..... 5

### センターからのお知らせ ..... 13



【表紙写真:ベルリン、ブランデンブルク門】

ベルリンのシンボルとして多くの人が観光に訪れるブランデンブルク門ですが、東西冷戦中はベルリンの壁で塞がれ自由な通行は禁止されていたそうです。現在はこの門を挟んで東西にパリ広場、ティーアガルテンが広がり、市民の憩いの場にもなっています。すぐ近くには国会議事堂や各国の大使館など公的機関が集まっており、ドイツの政治の中心であることが実感できます。

# センター活動報告

## フンボルト財団（AvH）ネットワークミーティングに参加

日時：2022年4月27日（水）－28日（木）

場所：ロストック大学

参加者：須藤副センター長、河合国際協力員

4月27日から28日にかけてアレクサンダー・フォン・フンボルト財団（AvH）が支援する奨学生のためのネットワークミーティングがロストック大学で開催されました。AvHは本会のドイツにおける対応機関の1つであり、研究者の学術交流を支援する機関です。当該イベントは、同財団の支援を受けて活躍する研究者のネットワーク構築を目的に毎年開催されています。昨年はオンラインでしたが、今年は実地での開催となりました。1日目には、Enno Aufderheide AvH事務局長の挨拶と、Dr. Inna Sokolova ロストック大学生物科学研究所教授による基調講演が行われました。その後は地域別に分かれて奨学生や財団職員

との交流セッションが設けられ、情報交換や奨学金制度に関する質疑応答等が活発に行われました。2日目には研究領域ごとのグループに分かれてロストック大学の研究所見学プログラムに参加し、参加者と交流しました。そのなかで本会事業を紹介し、日本での研究活動を実施するうえで有益な事業への応募を促しました。



▲オープニングの様子

写真提供：アレクサンダー・フォン・フンボルト財団

Image Right: Universität Rostock/Christiane Zenkert

## “G7 + Partners” Higher Education Summit 2022 に参加

日時：2022年5月3日（火）－5日（木）

場所：在独フランス大使館、フランス大聖堂（ベルリン）

参加者：林センター長、田村国際協力員

6月のG7サミットに先駆け、議長国ドイツの学術助成機関DAADが5月3日～5日にベルリンでG7+Partners高等教育サミット2022を開催しました。本会議にはG7諸国をはじめ、7か国のパートナー諸国（スペイン、ポーランド、ノルウェー、オランダ、フィンランド、チェコ、オーストリア）及び欧州連合の国際教育機関・学術助成機関等が参加し、日本側として当センターの林センター長、田村国際協力員が出席しました。

“International Academic Cooperation amidst a World in Crisis: Chances and Challenges”というテーマで3日間に渡り行われた本会議は、DAADのKai Sicks事務総長およびAnne-Marie Descôtes在独フランス大使のご挨拶で幕を開け、一日

目は在独フランス大使館を会場にレセプション及び情報交換が行われました。

二日目のTour de Tableでは林センター長から本会の事業説明及び危機状況下における研究者支援の取組について紹介したほか、ワーキンググループに参加し、“International Cooperation in the Face of Global Challenges: Science/Knowledge Diplomacy in the 2020s”というテーマのもと、科学技術外交の定義づけや学術助成機関・高等教育機関の役割等について各国参加者と意見を交わしました。

最終日には“The Interaction of Politics and Higher Education Management”及び“International Institutional Cooperation – Perspectives from Universities”というトピックでパネルディスカッションが行われ、主に国際社会が懸念を抱える国々との研究・学術交流の在り方に焦点を当て活発な議論が交わされました。会議の最後には共同声明として「危機的状況にある世界における国際学術協力に関するベルリン宣言」が採択され、気候変動、ジェンダー平等、医療、紛争の平和的解決などのグローバルな課題に対する解決策を模索・開発することが国際学術協力の使命であり、脅威にさらされる学生や研究者の支援に継続的に取り組んでいくことが再確認されました。

## 第 25 回日独学術シンポジウムを開催 「Bioecomnomics」

日時：2022 年 5 月 20 日（金）～21 日（土）

場所：ベルリン日独センター（Japanisch-Deutschen Zentrum Berlin）

参加者：林センター長、須藤副センター長、Schulze 現地職員、Albers 現地職員、田村国際協力員、河合国際協力員

JSPS ボン研究連絡センターは、2022 年 5 月 20 日及び 21 日の 2 日間、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会（JSPS Club）との共催で、第 25 回日独学術シンポジウム「Bioecomnomics」をベルリンで開催しました。当日は、JSPS 事業経験者を中心として 90 人を超える参加者が来場し、オンライン配信への参加もありました。日本からは、東京都立大学の奥真美教授、福島大学の金子信博教授、京都大学の浅利美鈴准教授、秋田県立大学の早川敦准教授の 4 名が講師として参加しました（内 1 名はオンラインでの参加）。

1 日目は、同窓会の Heinrich Menkhaus 会長、在ドイツ日本国大使館柳秀直特命全権大使ら開催国側代表者及び日独の代表者から開会の辞が述べられました。ベルリンで活動している日本人の音楽家による演奏の後、今回のテーマである「Bioecomnomics」に関する 2 つのセッションを実施しました。最初のセッションではオーストリアと日本を例示した SDGs、食品消費といったテーマに焦点を当てた発表があり、続いて 3R（Reduce, Reuse, Recycle）、循環型経済関連の法律や政策に関する研究発表がありました。終了後には、在ドイツ日本国大使館によるレセプションがあり、参加者らは交流の機会を

楽しんでいました。初対面を含む様々なキャリアステージや国の方が活発に交流する様子は、対面ならではの感じられました。

2 日目には須藤副センター長が JSPS の国際事業紹介を行いました。その後、2 つのセッションを実施し、これらのセッションでは生物経済学に関連する農業の手法や土壌など自然の地形、生態系サービスとデジタル技術の連携について研究発表がなされました。

今回のシンポジウムはコロナ禍による延期のため 3 年ぶりに対面で実施され、いずれのセッションの後にも活発な質疑応答が行われました。またコーヒーブレイクにおいても盛んな意見交換が行われました。全セッション終了後には、林センター長からのシンポジウムが盛況のうちに終了したことへの謝辞とともに、今後の日独学術交流のさらなる発展への期待が述べられました。

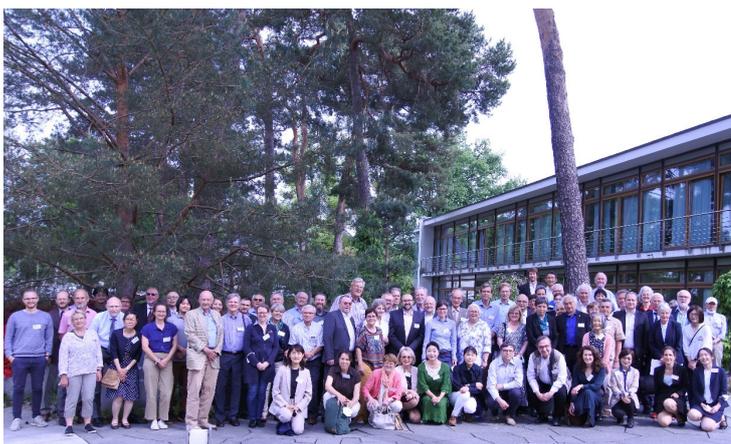
同時に、JSPS Club の総会も開催され、JSPS Alumni Club Award（JACA）の授賞式があり、今年は現在京都大学に在籍中の Dr. Holger Ties が受賞されました。また、コロナ禍により 2020 年開催が延期されなければ JSPS-Club25 周年であり、今回 JSPS Club へ参加して 25 年以上の会員への表彰も行われました。最後に総会の機能として同窓会の会計、人事事項や今後の活動内容を決定しました。



▲各セッションの様子

林センター長による  
閉会の挨拶▶

◀集合写真



## サマー・プログラムキックオフミーティング、ブレイクアウトセッションに参加

日時：2022年5月31日（火）

場所：Web

参加者：林センター長、須藤副センター長、Schulze 現地職員、田村国際協力員、河合国際協力員

日本学術振興会（JSPS）東京本部及び総合研究大学院大学の共催で、サマー・プログラムキックオフミーティングが Web で開催されました。ドイツからは、サマー・プログラムに採用され、渡日を控えている合計 22 名が参加しました。

サマー・プログラムは、欧米主要国の博士号取得前後の研究者を、夏期 2 ヶ月間、日本に招致し、日本の文化や研究システムに関するオリエンテーションと日本側受入研究者の下での研究機会を提供するもので、総合研究大学院大学との協力により実施しています。

例年は、渡日後に総合研究大学院大学で行われているキックオフミーティングですが、本年は昨年引き続き新型コロナウイルス（COVID-19）の影響で Web による開催となりました。

当日は総合研究大学院大学による進行のもと、JSPS 東京本部の水本哲弥理事、総合研究大学院大学の長谷川真理子学長のビデオメッセージから始まりました。その後、過去のプログラム参加者である Rayendra Anandika 氏によるプレゼンテーションがあり、研究内容の紹介、渡航後の研究生活において重要なことなど、これから渡日するプログラム参加者にとって参考になる情報が提供されました。次に、プログラムに関係する企業による日本語学習支援についての説明、オンラインホームステイについての説明が行われ、日本を体験するそれらのプログラムについて理解を深めました。

その後、プログラム参加者の国ごとのブレイクアウトセッションが行われ、ドイツからの参加者に対してドイツ学術交流会

（DAAD）東京事務所の Pascal Wenz 氏から、日本への入国やビザ発給に関するの情報などが提供されました。Q&A セッションでは、日本への渡航及びプログラムについての質疑も活発に行われ、COVID-19 の影響下での入国やプログラムについて最新の情報が提供されました。

## フンボルト財団（AvH）年次総会に参加

日時：2022年6月22日（水）－23日（木）

場所：ベルリン自由大学、大統領官邸、フンボルト大学等

参加者：林センター長、須藤副センター長

コロナ禍後初の対面開催となったアレクサンダー・フォン・フンボルト財団（AvH）年次総会では、来賓とともに、フンボルトフェローとして来独中の世界各国からの優秀な若手研究者や一部の元フェローらが一堂に会しました。エマニュエル・シャルパンティエ所長（マックス・プランク感染生物学研究所・2020年ノーベル化学賞受賞）の講演等で幕を切り、フンボルト大学での講演や研究室・キャンパスツアー、フンボルト研究賞授与式等が行われました。全体を通じて参加者間の交流が活発に行われ、フェローに対して資金助成のみではなく、今後のキャリアに繋がらうネットワーク形成の機会提供の重要性を感じました。

また、2022年シーボルト賞（Philipp Franz von Siebold Award）授与式において、フランク＝ヴァルター・シュタインマイヤー連邦大統領から受賞者である合田圭介教授（東京大学）

に直接本賞が授与されました。これにより合田教授は今後1年程度ドイツでも研究活動を行われることとなりますので、益々のご活躍を祈念いたします。



▲写真提供：アレクサンダー・フォン・フンボルト財団  
Image Right: Humboldt Foundation/Jens Jeske

## センター長コラム

昨年末のフンボルト財団主催のクリスマス音楽会でのこと、財団のとある職員から、私に紹介したい人がいると言われた。後日ボン市内の居酒屋で出会ったのが、ボン大学のゲプハルト・ワーナー（Gephart Werner）先生と、かつてそのもとで学位を取得された成蹊大学法学部の野口雅弘先生だった。

ワーナー先生は、2010年にボン大学でケーテ・ハンブルガー研究所（Käte Hamburger Kolleg）「文化としての法」を設立し、長らく所長を務めた人である。ケーテ・ハンブルガー研究所とは、ひとことで言えば人文社会科学系のWPIのようなものだと思っていただいて良い。ドイツ教育研究省（BMBF）は、人文社会科学分野の革新的課題について国際的研究を行う組織を支援するため、2008年から資金提供を始めた。この資金で運用される組織は、ドイツの人文学者ケーテ・ハンブルガーの名を冠することになったわけである。

そう言われても、実のところ何をやっているのかよく分からないので、年が明けてコロナが収まったら見学に行くと言束した。この3月末に、ようやくそれがかなうことになった。「文化としての法」研究所は、ライン川を挟んでボンセンターの対岸の再開発された地域にあった。研究室やセミナー室の大きな窓から見えるライン川の眺望がすばらしい。

「文化としての法」研究所は、2010年から2期12年にわたって総額2200万ユーロ（約30億円）の予算を受けたとのこと。国際的モビリティを重視した組織であるため、常勤研究者は所長を含めて3人しかいない。それ以外は、毎年10人受け入れている訪問研究者である。毎年の予算の半分（1.3億円程度）は、訪問研究者の諸経費に使うとのこと。訪問研究者は人文社会学者だけではなく、自然科学者もいて、長期・短期かなり自由に滞在できるようだ。

「プリンストンの高等研究所のような感じですね？」と私が聞くと、みかけはそうだが、高等研究所は訪問研究者をアポイントしているのに対して、「文化としての法」研究所では、公募によって誰でも訪問研究者になる機会があるところが違うとのことだった。

実はゲプハルト先生は画家でもあり、研究所にはアトリエもある。そこは20歳の画家（研究所の職員）がいつも使っているとのこと。日本的に言えば「分野融合」なのだろうが、法律の研究と芸術が全く違和感なく同居しているところに、伝統文化としての学術というヨーロッパの雰囲気強く感じられる。「文化としての法」研究所は、今年からはボン大学のエクセレンス・ストラテジーの資金で継続されるとのことだ。



ケーテ・ハンブルガー研究所「文化としての法」

（左は [https://de.wikipedia.org/wiki/Käte-Hamburger-Kolleg\\_„Recht\\_als\\_Kultur“](https://de.wikipedia.org/wiki/Käte-Hamburger-Kolleg_„Recht_als_Kultur“) から転載。CC-BY-SA Hans Weingartz）

# ドイツ学術ニュース

## シュタルク＝ヴァッツィンガー大臣：健康研究はさらにデジタル化されなければならない

### 連邦教育研究省（BMBF）が、医療情報学イニシアティブの拡大に関する新しい資金助成ガイドラインを発表

予防的で、危機に強い近代的なドイツのヘルスケアシステムのために、連邦教育研究省（BMBF）によって資金助成された医療情報学イニシアティブ（MII）は、この数年で重要なイノベーションをもたらした。現在公開されている MII の拡張に関する資金助成ガイドラインによって、ドイツにおけるデータに基づく健康研究の新フェーズが始まる。

ベッティナ・シュタルク＝ヴァッツィンガー連邦教育研究省大臣による説明は以下のとおり。

「研究により得られた知識を実用へと移すこともものが、「機会をもたらす省」としての私たちの任務である。そのため、ヘルスケアシステムのデジタル化においては、分散化され、ネットワーク化された研究データインフラストラクチャに懸かっている。現在公開されている MII の拡張に関する資金助成ガイドラインによって、それを実現するためのルールを敷く。私たちは、MII が健康研究におけるデジタル化を全国的に達成するために、将来的に他の取組とさらに強く結びつけるつもりである。MII は、研究により得られた幅広い医学データリソースを科学に提供することによって、ドイツのデータに基づく健康研究の中核となることが期待されている。顕著な例は、今日すでに MII と大学医学ネットワークとの緊密な連携である。これにより、ドイツの全大学病院の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）患者のデータを分析するために共同でデータプラットフォームが構築された。パンデミックは、より大きなデータプールへの分析は、命を救うための知見をもたらすことを私たちに示した。健康研究はよりデジタル化しなければならない－新しい資金提供ガイドラインは、このための重要な礎石である。」

シャリテのベルリン健康研究所（BIH）のデジタル健康センターの創設ディレクターであり、ハイデルベルク大学附属病院名誉教授であるローラント・アイルス教授が以下のとおり補足する。

「全体として、私たちは MII の助成により、10 年以上の停滞後のヘルスケア分野のデジタル化に対して最重要ではないにしても、大きな推進力を与えたと言える。これに関連して、医療情報学イニシアティブは、パンデミック対応に対する大学医学ネットワークの迅速なスタートに大きな成功をもたらしたの重要な因子であったことを特に強調しなければならない。」

### 背景：

医療情報学イニシアティブ資金助成プログラムは、モジュール構造になっている。開発及びネットワーク化フェーズ（2018-2022）においては、BMBF は大学病院でのデータ統合センターの設立に 2 億ユーロ以上を資金提供する。具体的な適用事例により、コンソーシアムは IT ソリューションの付加価値を実践的に示す。

その後の拡大及び拡張フェーズ（2023-2026）の焦点は、大学病院間の連携拡大と新しいパートナーとの連携である。

加えて、BMBF は MII の一環として、6 つのデジタル健康推進拠点（FortschrittsHubs）に約 5000 万ユーロ助成している（2021～2025 年）。当初はパイロットプロジェクトであったが、コンソーシアムの先駆的研究を、開業医の外来診療からリハビリテーション施設や介護施設におけるケアまで、健康システムの他の分野へ組み入れることが目的である。

デジタルヘルス分野の研究と教育の強化のために、BMBF はさらに計 21 の若手グループによって新たに設立された教授会を支援し、約 3000 万ユーロを提供している（2020～2026 年）。

2022 年 1 月 28 日

BMBF : Stark-Watzinger: Die Gesundheitsforschung muss digitaler werden

<https://www.bmbf.de/bmbf/shareddocs/pressemitteilungn/de/2022/01/280122-PK-MII-Ausbau.html?sessionid=9D7FC82EB95AA7FAA039E2EE8E8C05F5.live721>

## 大学間キャンパス：多言語・デジタル・人本位

ヨーロッパの大学連合は国境を越えて協働し、大学間キャンパスを作っている。そこで、多言語使用とデジタル化はどのような役割を担っているのか。また、どのように市民や地方自治体の交流を行っているのか。NeurotechEU、Circle U、EURECA-PRO、Transfer4Europe の 4 人の代表者は、実践的な経験を報告している。

欧州の大学は、EU 加盟国の決定を受け、2017 年にすでに戦略的パートナーシップ設立や提携の形成が始まっていた。その一方で、欧州に広がる 41 の連合はそれらのコンセプトを実行している。国境を越えて協力しているにもかかわらず、彼らはそれぞれ地理的に一つの場所に根差していたり、一つの都市で大きくなったり、キャンパスを持っていたりする。そしてこの大学キャンパスは、講義室、ホール、カフェテリア、スポーツイベントなどあらゆる場で人々が出会い、アイデアを交換することで繁栄する。それは、例えば公開講座やイベントなどを通じたキャンパスの外の市民との交流、それぞれの大学がある地域のコミュニティとの交流でもまた成長する。

しかし、何が欧州にまたがる大学間のキャンパスの構成要素となるのか。連合はそれによって何を理解するのか。多言語化と進歩し続けるデジタル化はどのような役割を果たすのか。大学以外のパートナーとのネットワーク構築はどのようなものか、科学と社会組織のネットワーキングはどのようなものか。NeurotechEU、Circle U、EURECA-PRO、Transorm4Europe の 4 人の代表者は、様々な角度から大学間キャンパスについて光を当てている。

### NeurotechEU：大学間キャンパス－総合ビジョン

ボン大学のクリスティアン・ヘンネベルガー教授は、NeurotechEU 連合の「教育と研究」部門を統括し、かつ理事会のメンバーでもある。

「NeurotechEU 連合の私たちにとって、大学間キャンパスは、日々集まり、交流し一体感を感じる場所、また公的な機能を果たす場所である。この目的のため、NeurotechEU の中心にあるプラットフォーム『Campus + 』は作られた。仮想空間として、Campus + は私たちの連合に参加している全てのパートナー大学の拡張を表し、学生、教員、研究者、事務職員に、彼らの居住地や、社会的障壁や障害にかかわらず、一緒に活動する機会を提供する。私たちのビジョンでは、NeurotechEU Campus

+ は知識が創造れ、共有される場であり、そして多様性の受容が促進される場である。

私たちの連合の狙いは、学生、教員、研究者のニーズを明らかにし、Campus + を通して柔軟なデジタルソリューションを提供することである。それゆえ、Campus + は純粋な学習管理システムとしてだけでなく、ユーザーに様々なコミュニケーションツール、コンテンツ配信、フィードバック、組織化やコラボレーションへの無制限なアクセスを提供するプラットフォームとしてデザインされている。加えて、仮想現実・拡張現実のツールによる視点の拡大が計画されている。Campus + をバリアフリーのプラットフォーム（キーワード E-アクセシビリティ）としてデザインすること、また適用されたプログラムがオープンソースであることは我々にとって特に重要である。

Campus + では、すべてのパートナー大学のメンバーは、連合内の集合知から便益を得たり、様々な方法で国際的な経験を積めたりすることができるようになっている。科学の交流をこのように促進するのみならず、同時に欧州で共通の学術的アイデンティティの形成を支援することが私たちの目標である。」

### NeurotechEU

NeurotechEU アライアンスは、脳科学の分野における以下 8 つのパートナー大学をまとめている。

- ・カロリンスカ研究所（スウェーデン）
- ・オックスフォード大学（英国）
- ・ラドバウド大学（オランダ）
- ・ボン大学（ドイツ）
- ・デブレツェン大学（ハンガリー）
- ・クルージュ医科薬科大学（ルーマニア）
- ・ボアズィチ大学（トルコ）
- ・エルチェ・ミゲル・エルナンデス大学（スペイン）

欧州における喫緊の社会的・経済的課題について、脳を中心とする／脳から着想を得る解決策を見つけることを共通のビジョンとしている。学士、修士、博士課程の学生は包括的で学際的な教育を受け、多文化かつ多言語の環境の中で、欧州人としてのアイデンティティを発達させる。加えて、NeurotechEU は、生涯学習を積極的に推進し、250 以上の提携パートナーとともに

に欧州を脳研究・技術において世界のリーダーにするために貢献している。

### Circle U：大学間キャンパス－科学と社会のネットワーク

クラウス・ヴィール博士は、フンボルト大学ベルリンにおける欧州大学連合「Circle U」のプロジェクトコーディネーターである。

「Circle U の大学間キャンパスでは、社会全体の重要なトピックについて欧州の 7 大学が国境を越え共に活動している。大学の本来の教育と研究に加えて、Circle U は、科学と社会のネットワークという第三の重要な使命にも力を入れている。目標は、主要な課題として挙げられている現代の課題に対して、科学的な解決策を見つけることである。市民やコミュニティとの交流は、この点で重要な役割を担う。

ベルリンにおいて、連合の他の欧州の大学所在地と同様、Circle U は大学ではないパートナーとの広いネットワークを持っている。これらは会社、アクセラレーター、博物館や NGO を含む。一方、これらのパートナーは、大学の研究プロセスの中に専門知識を提供している一方、現在置かれた社会環境での関与を強めている。そのため、Circle U での大学間キャンパスは、学生、科学者及び社会との交流のみならず、分野間と大学間の交流を促進することを目的としている。

例えば、民主主義や気候変動、グローバルヘルスといったトピックにかかる学際的な「知識のハブ（Knowledge Hubs）」の中では、学術的背景がある人とならない人どちらのためにも共同提案は展開されている。このように、提案は意図的に都市社会から人々にもオープンになっている。例えば、フンボルト大学では「気候変動の実践者」のため研修プログラムを含んでいる。これは、気候危機の解決策を見つけるため、現場の科学者と共に働く政治家や経済界の代表者、活動家を含む。そのような取組の後ろでは、全国や地域で学生や研究者だけでなく、市民やコミュニティから支援されてこそ欧州の大学が成功するという信念がある。パンデミックは今なお市民との交流を難しくしているが、特にベルリンのような科学が強い都市でこのようなプロジェクトは肥沃な土地の上にあるといえよう。」

Circle U.

Circle U は、欧州の以下 9 つの大学で約 48 万名の学生と 3 万 8,000 名の教職員を繋げている。

- ・オスロ大学（ノルウェー）
- ・オーフス大学（デンマーク）
- ・キングス・カレッジ・ロンドン（英国）

- ・パリ大学（フランス）
- ・ルーヴァン・カトリック大学（ベルギー）
- ・フンボルト大学ベルリン（ドイツ）
- ・ベオグラード大学（セルビア）
- ・ピサ大学（イタリア）
- ・ウィーン大学（オーストリア）

ネットワークの目的は、ジョイントディグリープログラムや共同博士課程を持ち、包括的で、研究集約的かつ学際的な欧州のキャンパスを形成することである。その際、Circle U は気候、グローバルヘルス、民主主義という 3 つの主要なテーマに優先的に取り組んでいる。焦点は非官僚的モビリティと大学以外のパートナーとの拡張したネットワークの設立である。プロジェクトは上記のトピック 3 つの知識のハブを設置する予定であり、そこでは市民が大学と交流でき、研究者と学生が研究を通して共に学べるようになる。Circle U の使命は、現代の主要な課題に取り組むため、及び健康、平和、民主主義を確実に促進するために、学生、研究者、公的セクターをまとめることである。

### EURECA-PRO：大学間キャンパス－多言語対応

カルステン・ドレベンシュテット教授は、フライベルク工科大学における欧州大学連合の EURECA-PRO のプロジェクトコーディネーターである。

「EURECA-PRO は、私たちの連合の欧州パートナー大学との協力、国を超えての大学間キャンパスの会議における戦略的課題として多言語化に特に力を入れている。これは包括的な英語の能力を促進することを含む一方、その国の言語能力も育成することも含む。私たちは卒業生に素晴らしい英語能力を保証し、彼らが第二言語や更なる言語でトレーニングできるような状況を作りたいと思う。フライベルク工科大学とミットヴァイダ応用科学大学は、DAAD のナショナルサポートプログラムを活用し、例えばスペイン語、ポーランド語での教育を推し進めることができるだけでなく、「外国語としてのドイツ語」の言語提供を拡張した。

学士、修士、博士の共同プログラムの開発において、学位に関係したコースの提供をパートナー大学での現地の教育言語で行うことで、多言語化は考慮されている。それゆえ、コースカタログは、英語とドイツ語のコースに加えて少なくとも 4 言語を含み、学生はそれぞれの言語スキルにより選ぶことができる。オンラインを利用すれば学生は外国語が話される場所に行かずとも外国語で学ぶことができる。第二外国語は、共同プログラムにおいて必修科目である。ネイティブスピーカーの活用を通して教育の高い質は保証することができる。EURECA-PRO コンソーシアムで、

サマースクールや研究旅行のような短期間のオファーも、受入国の紹介を目的として入学準備語学モジュールに組み合わされている。

異なる言語での知識の移転という点において、EURECA-PROは、教育や研究に携わる大学職員の言語研修を促進する必要性も感じている。この重要な課題は DAAD のナショナルサポートプログラムのおかげで、連合が対処することができる。」

## EURECA-PRO

責任のある消費と生産についての欧州大学連合 (The European University Alliance on Responsible Consumption and Production ; EURECA-PRO) は欧州の以下 7 つの大学によるネットワークである。

- ・ミットヴァイダ応用科学大学 (ドイツ)
- ・フライベルク工科大学 (ドイツ)
- ・シレジア工科大学 (ポーランド)
- ・モンタン大学レオーベン (オーストリア)
- ・レオン大学 (スペイン)
- ・ペトロシャニ大学 (ルーマニア)
- ・クレタ工科大学 (ギリシャ)

パートナー大学は、「責任ある生産と消費」の分野において各自で研究・研修推進の目標を設定している。その施策には特に、新しい技術とプロセスの開発、循環型経済や代替原料を通して資源利用の効率化などが想定されている。参加大学は、工学、政治科学、社会科学、環境科学、経済科学などにおいて学際的な研修と研究、社会への移転を可能にする様々な専門領域を持つ。

## Transform4Europe : 大学間キャンパスーデジタル化

カローラ・ホディアスはザールランド大学の国際関係部における戦略パートナーシップの幹部である。特に、彼女は国境を越えた大学ネットワークである「グレイトリージョン大学 (Universität der Großregion) 」と欧州大学連合「Transform4Europe」によって行われる構造的変化に携わっている。

「大学連合 Transform4Europe は、多言語の欧州大学間キャンパスを作っている。学生と研究者は連合の全ての大学の提案を積極的に使い、共に研究、教育、学習することができる。パートナー大学間のモビリティは、各学習プラットフォームと学生データの管理システムの間インターフェースを作ることにより将来促

進する予定である。学位とモジュールの相互認識は、欧州に最適化された学習コースを可能するだろう。その際、デジタルコミュニケーションチャネルは、協力の新しい機会を作り、大学ごとの垣根を超えたガバナンス構造の設立を促進し、特に、コロナウイルスのパンデミックによる制限の間、出会いの場を提供する。

欧州大学キャンパスを象徴するのは、学生や従業員のための、アプリをベースとした ID カードであり、それは全てのパートナー大学で提供されるデジタルアクセスを可能にする。パートナー大学の繋がる要素として、Transform4Europe 週間がある。それは革新的な欧州の教育とモビリティ形式のための自由な空間を作り、個人的な出会いと協力の機会を提供する。デジタルグローバル教室プロジェクトはすでに大学間の教育機会を作っている。

協力の運営的なハードルは、IT 識別子の配分から短期間のモビリティの登録まで、現実的な個々の解決策で乗り越えられようとしている。「紙なしでのエラスムス (Erasmus without Papers) 」のフレームワークの中で、プラットフォームは現在、データの交換と学習到達のため開発されており、それは全ての大学運営で重要な課題であるが、大学間のスムーズな移転も可能にする。それゆえ、デジタルプラットフォームから始めることで、Transform4Europe キャンパスは真の欧州の科学的な空間を作っている。それは、個人のモビリティと協力プロジェクトを通して個人的に経験することができる。」

## Transform4Europe

大学ネットワーク Transform4Europe、知識起業家のための欧州大学は欧州の以下 7 つのパートナー大学からなる連合である。

- ・エストニア芸術アカデミー (エストニア)
- ・ヴィータウタス・マグヌス大学 (リトアニア)
- ・シレジア大学カトヴィツェ (ポーランド)
- ・ザールラント大学 (ドイツ)
- ・トリエステ大学 (イタリア)
- ・アリカンテ大学 (スペイン)
- ・ソフィア大学 (ブルガリア)

連合の一つの焦点は「知識起業家 (Knowledge Entrepreneurialism) 」というコンセプトである。パートナー大学は、高い水準の専門家のみでなく、変革の力強い主体の役割を担う欧州の知識起業家をトレーニングするため、彼らの地域からの重要な関係者とともに協力したいと考えている。プロジェクトの重要な施策は、海外滞在期間の認識と単位認定を簡素化

することを目的とした、ネットワークにおける管理プロセスのデジタル化である。

2022年2月1日

## ザッテルベルガー政務次官：研究移転は私たちに とって重要である

BMBF（Bundesministerium für Bildung und Forschung：ドイツ連邦教育研究省）の検証プログラムVIP+は、優れた研究成果の実践への目覚ましい移転を表彰した

本日ベルリンで開催されたVIP+イノベーション会議2022において、研究成果を革新的に応用した模範的な方法として、3つのプロジェクトが連邦教育研究省から表彰された。

これに関して、トーマス・ザッテルベルガー政務次官は次のとおり説明する：

「研究は未来の価値創造のための基礎であり、同時に質の高いヘルスケアを保証するものである。このことは新型コロナウイルスの世界的流行においても明らかになった。卓越した研究と多くの優れたアイデアが本物のイノベーションになるには、研究成果が実践に至ることが非常に重要である。研究移転は私たちにとって常に重要である。そのため、連邦教育研究省は、VIP+プログラムにより研究成果の経済的な活用と社会的な応用への移転を奨励する。採択されたプロジェクトは、研究成果が迅速に、そして多くの市民や企業のために利用できるという点で共通している。表彰された3つのプロジェクトは、革新性により、それぞれの分野の真の先駆者であるだけでなく、より良いヘルスケアあるいはより持続可能な製品への可能性を有する。」

背景：

経済的または社会的イノベーションの道を舗装し、加速させる—これは連邦教育研究省（BMBF）が、助成プログラム「科学研究の技術的及び社会的イノベーションの可能性の検証

（VIP+）」において目標とするところである。表彰されたプロジェクトは、例えば、「心臓ズボン（Herzhose）」がどのようにコロナ患者の足の血行不全を軽減するか（AngioAccel）、病院において特定の耐性菌に対していかに抗生物質を作用させるか（aBACTER）、あるいは、プラスチック包装の材料とエネルギー

DAAD：Der inter-universitäre Campus: Mehrsprachig, digital und bürgernah

<https://www2.daad.de/der-daad/daad-aktuell/de/81767-der-inter-universitaere-campus-mehrsprachig-digital-und-buergernah/>

を大幅に削減するために、対象の加熱プロセスがどのように役立つか（CeraHEAT）ということを示す。

表彰された3機関は、以下のとおりである：

ミュンヘン工科大学

プロジェクト：aBACTER—致死性感染症治療のための耐性菌の無い抗生物質の前臨床開発

研究チームは、実際にがん治療に使用され、抗菌作用を持つ薬剤が、化学修飾することで、多剤耐性菌に対して効用を示すことを発見した。チームは、その研究において化学、細胞生物学、質量分析の方法を組み合わせた。「aBACTER」プロジェクトは、VIP+プログラムにおいて、心臓内膜の炎症を治療する抗生物質開発に向けてこれらの成果の有効性を確認した。aBACTERの成果を長期的に継続するために、このプロジェクトからsmartbox社が設立された。多剤耐性菌は、世界中の多くの病院で急速に増えている問題である。このようにaBACTERプロジェクトによるイノベーションは、世界中のヘルスケアを進歩させ、多くの命を救う可能性を持つ。

ブランデンブルク医科大学

プロジェクト：AngioAccel—アンテパルセーション

（Antepulsion）による末梢閉塞性疾患（pAVK）の非侵襲的治療：脚の生物学的バイパスのための革新的なコンセプト

AngioAccelの治療コンセプトは、ECG（心電計）制御カフを使ったいわゆる「心臓ズボン（Herzhose）」の力を借りて、末梢閉塞性疾患（pAVK）つまり足の血行不全の患者の血流を増加させることである。その結果、患者の運動能力は明らかに向上する。VIP+プログラムにおけるAngioAccelプロジェクトの目標は、この疾患のある患者の治療コンセプトの有効性を確認することであった。プログラムで実施された研究は、大成功を収めた。患者の生活の質と運動能力は大幅に向上し、歩行距離を最大500%まで伸ばすことができた。

フラウンホーファー加工機械・包装技術応用センター（AVV）及びドレスデン工科大学

プロジェクト：CeraHeat – 効率的かつ高速な、接触型空間分解表面加熱プロセスの開発

フラウンホーファーAVVとドレスデン工科大学は、プラスチック包装製造のための新しい加熱システムを開発した。これによりエネルギー消費量を大幅に削減しながら成形プラスチック製品の品質を向上させられる。これはとりわけ、プラスチック製品の表面を急速かつ狙いを定めて加熱させることで実現する。局所加熱の原理は、多数の小さな加熱ピクセルに基づく。CeraHeat プロジェクトでは、VIP+プログラムのなかで新しい技術が産業に即し条件下で使用可能かどうか検証され、大きな成功を収めた。このイノベーションにより、包装プロセスにおいて少なくとも30%の材料とエネルギーを節約することができる。

BMBF は、助成プログラム「科学研究の技術的及び社会的イノベーションの可能性の検証 (VIP+)」を2015年に開始した。この

プログラムは、卓越した技術的及び非技術的な研究成果を、後に応用又は活用に関して検証する研究者たちを支援する。プロジェクトは、例えば高度に経済的あるいは社会的利益をもつ応用分野において、その研究成果が実用・実現可能かどうかを検証する。このようにVIP+は、すべての参加機関における成果移転の強化にも寄与している。VIP+の開始以来、175のプロジェクトが承認され、助成額は2億ユーロ近くにのぼる。VIP+による各助成終了後の5年間で、かつてのプロジェクトのほぼ3分の1が起業につながった、あるいは起業段階にある。VIP+プログラムでの研究をもとに、助成終了したプロジェクトの5分の1以上で新しい特許が出願されている。

2022年3月22日

BMBF : Sattelberger: Forschungstransfer ist für uns zentral

[https://www.bmbf.de/bmbf/shareddocs/pressemitteilung\\_n/de/2022/03/220322-Validierungspreise.html](https://www.bmbf.de/bmbf/shareddocs/pressemitteilung_n/de/2022/03/220322-Validierungspreise.html)

## 「ネットワーク全体が必要」

Andrea Löther氏は、フンボルト財団の委託を受け、国際的なモビリティとドイツでの研究滞在に魅力を感じるかどうかという視点を持って、国際的に活躍する女性研究者の可能性と需要を分析する研究を主導した。以下は、アクセス、障壁、多様性によって卓越した研究者等とより評価されるための機会についての対話である。

Lötherさん、「アクセス、障壁、女性科学者の国際的なモビリティの可能性」についての研究を実施するとき、何に最も驚きましたか。

Andrea Löther氏：かなり驚きがありました。最大の驚きの一つは、国際的に活躍する優秀な女性を研究滞在させるためには、ドイツのアカデミックホストがいかに重要であるかということです。

説明していただけますか。

男性は男性と、女性は女性と共同研究することが多い傾向にあります。これはフンボルト財団のネットワークでも同様です。これ

を変えるには2つのアプローチがあります。財団がホモソーシャルな連携を活用し、ドイツの女性科学者をホストとしてますます活動させることによって、より多くの女性科学者をゲスト科学者としてそのネットワークに引き入れられるようになります。他方で、財団は、既にHenriette Herz Scouting Programmで行っているように、男性科学者に対して、若い女性科学者を共同研究相手として認識、指名、指導するよう特に促進することができます。

ホストがスカウトマンになり、最大3人の国際的な若手科学者をフェローシップに直接採用し、最初の候補を女性科学者にするというアプローチはいかがでしょうか。

そのプログラムは、とても良いやり方です。私のアドバイスは、女性科学者を積極的に探すよう参加者に促す同様の仕組みを、他の助成金プログラムにも取り入れるということです。この研究で調査したフンボルト財団のプログラムの採択率では目立った男女差は見られませんでした。これは申請あるいは推薦される前に多くの事項が決定されるということ、言い換えれば特定の共同研究プロジェクトがどのように生まれるか、ということを表しています。

この関連で何か特別なパターンを見つけましたか。

はい。共同研究は個人的な結びつき、推薦あるいはネットワークに基づくことが多くあります。基本的にはドイツでホストを見つける機会、あなたが自国で、ドイツと良い関係性のあるメンターを見つけられると増加します。ほとんどの場合、ドイツの研究者は多くのメンター要請を受けるため、選考せざるを得ません。しかし、その際の基準には無意識のバイアスが含まれていることがあり、結果的に構造的な排除パターンを強めてしまうことがあります。個人的なつながりや信頼できる人からの推薦が決め手となることも頻繁にあります。

このような補強の例はあるのでしょうか。

例えば、ある地域からの依頼は、他の地域よりも早く処理される傾向があります。アフリカの大学の女性研究者は、アメリカの有名大学の研究者よりも常に注目されにくいです。

しかし、厳密に言えば、男性科学者にも同じことが言えます。

そうです。しかし、女性科学者の場合、こうした要因を補填するために必要な推薦や人脈を得るときのハードルはより高くなります。これは、調査した14カ国すべてで見られることです。女性科学者は研究のための経済的・時間的資源のみならず、古くから人脈交換の場と考えられている学会のようなネットワーク形成のためのこうした資源も少ない仕事に就いている傾向にあります。また、女性科学者がそのようなイベントにあまり参加しなければ、さらに注目されにくくなるかもしれません。

これをどう考えますか。

男性科学者の方がより多くの講演機会を得る傾向があり、科学者は男性科学者の講演に出席する傾向があります。また、これまでの研究では引用に関しても同様のことが示されています。そのため、常に「自分は誰を認識しているのか。誰の話に聞いているのか。」という疑問に繋がる。女性科学者の科学的業績は、まだ認知度が低いです。これが、我々の研究で卓越性という概念に大きく注目した理由の一つです。

卓越性という概念の何が問題なのでしょうか。

卓越性は中立的な概念ではないことを意識することが重要です。女性科学者は自分が卓越していると認識しにくいですが、逆も然りです。女性科学者は男性科学者に比べて、科学的業績の認識において卓越していると見なされる確率が明らかに低いことが示されています。これは、専門分野の立ち位置、分野の指向、方法論的アプローチ、能力帰属における基本的パター

ン、出身地域の科学システムの評判など、多くの要因と関連しています。

ここで何ができるのでしょうか。

ドイツでは、研究での議論において、卓越性と男女共同参画政策との間で目標がしばしば衝突します。幅広い層から採用するほど、卓越した人材を獲得できる、ということを我々は理解するべきです。知性や創造性のような資質が正規分布していると仮定した場合、平等と多様性に配慮しなければ我々は膨大な可能性を見落としてしまいます。

フンボルト財団が実現できることは何だと思えますか。

第一段階として、男女共同参画政策は通常女性自身に焦点を当て、彼女たちを可視化し、意識を高めることに努めます。我々もフンボルト財団でこのことを観察しています。次の段階は、構造的かつ制度的なレベル、つまり疑いなく厚い板です。財団が既に着手している学術的な卓越性と多様性の関係性のような課題を進展させるために、全体的なネットワークが必要です。

どうということでしょうか。

フンボルト財団のような組織は、ドイツの科学システムの一部であり、そのなかに統合されています。ある程度、システムが設定した障壁とともに生きています。しかし、財団は、プログラムの設計、アクセス方法の策定、受入機関へのアプローチの仕方などで、その形成に寄与することもできます。同時に、助成金受給者や同窓会を通じて彼らの出身地域の状況に影響を与える機会までもあります。この相互作用の中で、財団は多くのことを成し遂げられると確信しています。

調査対象地域を見ると、高い能力を持ち、国際的に活躍する女性研究者が、より良くドイツでの研究滞在を送るには何をすればよいのでしょうか。

デュアルキャリアというのは大きな話題で、その大きさはまた別の驚きです。これらの対象グループの女性科学者は、男性科学者に比べて子供を持つことが少ない傾向にあります。パートナーと生活している場合は、それぞれの職業やキャリアを持ったパートナーと一緒にことが多いです。研究滞在中の同居をどうするかということは、中心的な問題です。もちろん、誰もパートナーのために仕事を確約できません。しかし、我々の調査によれば、ドイツの求人市場に関する基本的な情報は役立つことが多いようです。大

学は既にこのサービス提供に力を入れています。しかし、その需要がいかに大きいかが、さらに意識を高めるべきです。

子ども手当など家族手当の需要はいかがでしょうか。

フンボルト財団のプログラムでの調査によれば、女性科学者よりも男性科学者の方が頻繁に家族手当を利用しています。これは、すでに述べた人口動態によるものです。ここで区別しておくべきですが、家族手当はもちろん正當かつ重要です。我々は受給者グループを、結婚していない異性及び同性のパートナーシップ、その他の同伴家族も含む形に拡大することを勧めています。

特に、誰が子どもの世話をするかという問題に関しては、地域によって家族モデルやニーズが大きく異なります。しかし、家族手当は家族を持つ研究者の参画に役立つものであり、明確に女性科学者の参画に役立つものではありません。

2022年3月30日

AvH: "It takes the entire network"

<https://www.humboldt-foundation.de/en/explore/newsroom/news/it-takes-the-entire-network>

## シュタルク＝ヴァッツィンガー大臣：連邦教育研究省（BMBF）が、ドイツ技術移転機構（Deutsche Agentur für Transfer und Innovation）にゴーサインを出す

連邦教育研究省は DATI の要点を公表し、ステークホルダーとの対話を告知する

本日、新たなドイツ技術移転機構「DATI」の要点を公表した。DATI の設立により、連携協定の中心的な関心事が実行されつつある。特に、応用科学系の大学、中小規模の大学及びそれらに関わる地域のイノベーションネットワークを支援することを目的としている。経済及び社会におけるあらゆる技術・社会的革新を推進する。

連邦教育研究省ベッティナー・シュタルク＝ヴァッツィンガー大臣は以下のように説明している。

「我々は今ドイツ技術移転機構、DATI を立ち上げようとしている。特に中小規模の大学や応用科学系大学で生み出される多くの優れたアイデアや研究成果を経済や社会に移転し、持続可能な方法で地域に定着させる助けになりたい。主に分散化され、必要に応じてアドバイス、ネットワーク、支援、促進を行う、無駄のない機敏なイノベーションエージェンシーを作り上げる。地域の強みを強化し、新たな関係者に意見を求め、相乗効果を高め、地域のイノベーションダイナミクスを助成したい。」

連邦経済・気候保全省のフランチェスカ・ブランドナー大臣政務官は次のように補足する。

「DATI は地域特有の移転とイノベーションのシステムを強化する。我々は、企業が地域のネットワークの中で研究やイノベーションを実施することを可能にする。その際、イノベーションの関係者や市民社会を集中的に取り込んでいく。イノベーションを先導する省庁として BMBF と BMWK は、イノベーションの拠点としてドイツが成功することに連携して貢献するため、DATI の取組を推進し続ける。」

トーマス・ザッテルベルガー連邦教育研究省大臣政務官は次のとおり公表している。

「DATI は、研究・イノベーション政策における指針となるプロジェクトであり、私の特別な関心事でもある。そのため、関係者とコンセプトを協議するために速やかにステークホルダー同士で対話し、提案を発展させて計画をより拡張する予定である。ドイツには更なるイノベーションが求められる。したがって、地域に焦点を置いた持続可能なイノベーションエージェンシーが必要である。」

2022年4月11日

BMBF: Stark-Watzinger: BMBF gibt Startschuss für die Deutsche Agentur für Transfer und Innovation

<https://www.bmbf.de/bmbf/shareddocs/pressemitteilungn/de/2022/04/110422-DATI.html?sessionid=42E4099C7B573096D684CDF413668BD2.live722>

# センターからのお知らせ

## Twitter アカウントを開設

ボン研究連絡センターの Twitter アカウント

(@jsps\_bonn) を開設しました。

イベントや各種プログラムの公募など、在独の研究者の皆様や今後ドイツでの研究滞在をお考えの皆様向けの情報発信を行ってまいりますので、是非フォローとチェックをお願いいたします。



フォローはこちらから！



## 日本人研究者ネットワーク (JR-Net) のご紹介

本センターHP では、ドイツ語圏で自主的に立ち上げ運用されている日本人研究者ネットワークを紹介しています。

詳細はこちらをご参照ください。

<https://www.jsps-bonn.de/ja/to-all-japanese-researchers/jr-net>

## 今後のイベント

今年度も新型コロナウイルス (COVID-19) によりイベントの開催が流動的な状況です。

最新の情報はボン研究連絡センターの Web サイト (<https://www.jsps-bonn.de/ja/home/jsps-bonn-office>) や Twitter をご確認ください。

## 2022年4月1日から国際協力員2名が着任

慶應義塾大学の河合と申します。

2019年度に日本学術振興会東京本部で、若手研究者海外挑戦プログラムを担当しておりました。新型コロナウイルスの影響で東京本部での研修終了後には所属大学に戻り、3年越しの赴任となりました。ボンセンターでは上半期にドイツにおける高等教育・学術情報の日本語翻訳および広報誌の編集、下半期に会計業務を担当します。歴史あるボンの街で、日独の学術交流及び研究者支援に携わるこの貴重な経験から大学職員として様々な学びを得たいと思っております。

どうぞよろしくお願いたします。

新潟大学の田村と申します。

2019年度にJSPS東京本部で国際共同研究事業を担当しておりました。新型コロナウイルスの影響で渡航が延期となり、三度目の正直でようやく赴任が叶い嬉しく思っております。学生時代以来2回目のドイツ生活で、記憶の彼方からドイツ語を引っ張りだしているところです。上半期は会計業務、下半期は高等教育・学術情報の翻訳や各種広報等を担当します。コロナ禍や国際情勢など多くの課題に直面する中、欧州のアカデミアがどのようにそれらに対応しているのか、大学職員として研究・教育をどのようにサポートしていくべきか、今だからこそその学びを多く得られればと思います。どうぞよろしくお願いたします。

## 協力員コラム

ドイツの夏は空気がカラッとして気持ちが良いものの、日差しが厳しく、予想以上の暑さでぐったりしてしまいます。熱波の影響もばっちり実感しました。そんな暑さのドイツですが、飲食店で冷たい飲み物を注文してもたいてい氷は入っていません。アイスクリームショップが数多くあるのでしょっちゅうアイスを買って涼むようにしていますが、それでもやはり氷入りの飲み物が恋しく、ビニール袋タイプの製氷グッズを購入してみました。もちろん通常の製氷皿も購入可能ですが、ビニール袋タイプは小さいスペースにも入れやすいので重宝しています。気を付けて袋を開けないと氷が散乱してしまいますが、自宅の冷凍庫が小さくクーラーもないボンでの生活で一番の愛用品になりそうです。(エコではないかも?)

河合 国際協力員



▲ビニールの製氷袋の実物写真です。

パッケージの裏面には使い方がしっかり記載されています。



▲ブドウ畑が広がるリュエデスハイム/ドイツ有数のワインの生産地であり、街並みの美しさから「ラインの真珠」の異名を持ちます。

日本学術振興会ボン研究連絡センター  
JSPS Bonn Office  
Wissenschaftszentrum  
Ahrstrasse 58, 53175 Bonn (事務所住所)  
Postanschrift: 20 14 48, 53144 Bonn (郵便物用)  
Tel. +49(0)228-375050  
Fax +49(0)228-957777  
www.jsp-bonn.de